

## 滝澤三千代先生、多田謹次先生退任記念号の発刊によせて

滝澤三千代先生は、欧羅巴的知性と豊かな人間性を兼ね備えた方である。そのことは滝澤先生のご略歴が示している。まだまだ、女子大学生が珍しかった1956年に、日本の知性の頂点にあった東京大学文学部仏蘭西文学科を卒業されている。その時代のことについて先生から直接にうかがった事はないが、おそらく知の巨匠と言われた渡辺一夫教授など錚々たる知識人から薫陶を受けられ、大江健三郎などの優秀な学徒たちと机を並べられたことであろう。その時に先生の知性と教養が培われたことは疑いない。

東大で仏蘭西文学を修学され後、お茶の水女子大学の教育学科に学士入学され、続いて東京大学大学院の教育心理学を学ばれ、心理学者の道を進まれた。その時期に、人間と教育にかかわる学問を習得されたのであろうが、その根本にはヨーロッパのヒューマンイズムが脈々と流れていたであろう。

そのような学識と知性、そして教養を身に付けられた滝澤先生を東京経済大学がお迎えしたのは、1974年のことである。それから30年間にわたって、先生は「心理学」、「発達と学習の心理」などの科目を担当され、数多くの優秀な学生を育て上げられた。全学共通教育センターで催したささやかな謝恩の会で、先生の教えを受けた学生が東京大学大学院に進学したことを話された。東京経済大学で教えた学生が、滝澤先生が学ばれた大学院に進学したことは、教師冥利に尽きるものであったろう。そのことは想像に難くない。

滝澤先生は、1998年4月から1993年3月までの一年間、コミュニケーション学部長を勤められた。しかし、先生の30年にわたる東京経済大学の勤務で特筆すべきことは、つねに学生との接触を求められたことである。1982年から1984年には学生部長を勤められ、長年にわたって学生相談委員会のメンバーであり、1999年から2000年には学生相談委員会委員長を勤められた。

滝澤先生の本学での30年にわたるご活躍は、これからの大学の行く末を考える時、私たち後輩教員が見習うべき指標でもある。滝澤三千代先生の30年にわたるご活躍に心から感謝致します。

滝澤三千代先生，多田謹次先生退任記念号の発刊によせて

学生曰く、「鄧小平」の多田謹次先生。そのような極秘情報を入手し，改めて多田先生を拝顔した。「似ている」。それは表面的な類似性ではない。激動の中国の政争を生き抜いた鄧小平の風格を，多田先生の中に見た。

多田謹次先生は，1957年に千葉大学教育学部保健体育科をご卒業後，1959年に助手として東京経済大学に勤務された。まさに半世紀に近い45年間にわたって，東京経済大学で「スポーツ」，「健康の科学」の教鞭をとられた。この45年間は，東京経済大学もさることながら，日本の激動の時代であった。

東京経済大学赴任時の1959年は，第一次安保闘争の前夜である。政治も社会も混乱した時代であった。地方からは「金の卵」ともてはやされて，中学卒業生が集団就職で故郷を離れた時代である。大学生はエリートであった時代である。その大学生も，ほとんどが学生服を着たモノトーンの時代であった。食べるものも乏しかった。

そのような時代から飽食の時代の今日まで，多田先生は東京経済大学の学生を通じて，社会や政治の変化を凝視されてきたのであろう。まさに，先生は激動の，そして発展の東京経済大学の「生き証人」でもある。そこに，鄧小平と多田謹次先生の類似性を見るのである。

多田先生と言葉を交わす機会は決して多くなかった。今思えば，そのことは私の痛恨事の一つである。ただ，先生からは，校外でのスポーツの授業によるものであろうが，赤銅色に焼けた顔で，いつも笑顔で挨拶を返していただいた。キャンパスで学生と戯れる私を，優しく見守っていただいた。

経済学部の一学部から経営学部の二学部へ，コミュニケーション学部の三学部，そして現代法学部の四学部へと，東京経済大学は発展した。その発展はもちろん喜ばしいことであるが，人間的な，あるいは心の絆とでも言おうか，そんなものが希薄になっていくようにも感じられる。

キャンパスで顔を合わしても会釈させ交わせないスタッフが増えたように感じるの，私だけであろうか。多田先生は，言葉を交わさなくても，心が通い合う，理解し合える方であった。そんなことを感じている。多田先生の風格ある風貌と，優しい笑顔に接する機会がなくなったことは，非常に淋しい思いである。多田謹次先生，感謝を込めて，これからの，益々のご活躍を祈念致しております。

2004年10月

全学共通教育センター長 藤澤 房 俊